慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本財政史二種
Sub Title	
Author	永田, 清
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.4 (1941. 4) ,p.530(106)- 534(110)
JaLC DOI	10.14991/001.19410401-0106
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19410401-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本財政史二種

永田清

一、吉川秀造氏「日本財政史」（新經濟學全集所收）
二、土方成美博士「日本財政史」（現代日本文明史第六卷）

一

明治維新以後の日本財政の發展について最も注目すべき點は、財政と經濟との關係が極めて緊密であつて、謂はば兩者表裏一體をなして展開してゐる事實にある。したがつて日本財政の發展は經濟的地盤の究明なしには理解されい得ない點がその著しい特徴といつてよいであらう。

吉川秀造氏の「日本財政史」（新經濟學全集第十二卷及び第十三卷所收）と土方博士の「日本財政史」（現代日本文明史第六卷）とは共に明治以後の日本財政の發展を經濟的背景の上に描き出した異色ある文献である。勿論叙述の方法において兩者間に相異はある。土方博士は全篇の構想として各年度の歳出歳入を中心とする編年的方法をやめ、全體的に各時代の特徴を明らかにし、吉川氏は財政事實を忠實に逐つてそれを經濟發展の過程に織り込んでゐる。それ故、一見兩者の叙述は極めて相異る如くに思はれる。しかしその根本思想においては何等異るところはなく、寧ろ材料の採り方が幾分相異してゐるといふだけである。したがつて讀者はこの二つの日本財政史をみることによつて、日本財政の特質を明瞭に理解することが出來るのである。

日本財政の特質を明らかにしようとするこの二つの文献は、前述の如くその根本的方向において同一ではあるが、個々の事實については必ずしも同様の見解を示してゐない。且つ又、叙述の方法や材料の擧示においても、各々その特徴が示されてゐる。土方博士は詩歌を多く引用して時代の特徴を現はし、日本財政を出來るだけ興味ある讀物たらしめんがために努力し、吉川氏は歴史家の立場にあつて極めて嚴密なる資料を提示し、日本財政の事實を追求してゐる。しかし私にとつては何れも興味ある文献であつて、何等兩者について異なる印象をうけない。時代を強く描き出さうとする努力も、忠實なる財政事實の提示も、日本財政に注目するものにとつては、等しい興味を覺えさせるのである。

總じて日本財政史、特に明治以後の財政の發展を叙述する場合には、三つの方法が可能であると思はれる。その一は「明治財政史」や「明治大正財政史」に示される如き忠實なる財政事實の説明である。吉川氏はこの方法に最も多くの力を注いでゐる。さうしてそれが日本財政の研究に貢献するところ甚だ多いことも異論がない。その二は財政事實を生み出すべき時代の背景に目標をおく方法である。土方博士はかゝる社會史的立場にあつて日本財政の發展の跡を描いてゐる。社會的背景の叙述は一見容易のやうで、實は大なる苦心を要するところである。土方博士の努力はこの點で十分の效果をあげてゐるといつてよいであらう。その三は經濟史を中心とし財政事實を寧ろこれに從屬するものとして、日本財政の特質を描き出す方法である。前述の如く、わが國の財政は經濟そのものと密接なる關係を示す點に特徴があり、したがつて經濟史を地盤とすることなくしては、日本財政の姿は把握されないのであ

る。この點では、土屋喬雄氏の「續日本經濟史」（岩波全書）は之を一つの日本財政史といふべく、更には又、同氏の「日本資本主義の指導者たち」（岩波新書）も、日本財政史中の文献とみることが出來る。

しかしこの三つの方法はそれぞれ異つた立場を示すものではない。たゞ焦點のおき方の相異と強調する面が異るだけであつて、日本財政の特質を衝く點においては同一である。かゝる方法の歸一性はこれまた日本財政の特質より生ずるものとみられる。――日本資本主義經濟は國家の經濟たる財政を離れて之を論ずることが出來ず、また日本資本主義財政は經濟の發展と結びつけて之を論ずることなくしては、その特質を理解し得ないといふのが眞實であらう。

二

さて近刊二種の日本財政史について以下少しくその内容を示しておかう。

吉川氏は略々通例に從つて、明治以後の日本財政の發展を次の各時代に分けて論じてゐる。第一は明治初期の財政であつて、この章では、維新政府の成立と財政の窮之の有樣と、近代的制度の設立過程が述べられてゐる。第二は西南事變及びその後二十年代に至るまでの整理期と產業確立の準備時代とを論ずる。謂ゆる松方財政の登場によつて、一方では維新財政の整理を行ひ、他方ではそれを發足點とする明治財政の準備時代が示されてゐる。即ち紙幣整理、國債整理　財政制度の確立がこの時代の中心問題である。第三は日清戰役前後である。日清戰役は我國最初の對外戰爭であり、これを轉換として日本經濟は目覺しい展開をとげたのであるが、之を財政の裡においてみれば、最初の戰爭財政としての性格を植ゑつけ、且つその後の戰後經營を通じて、日本經濟の運命を決定するが如き制度の整備に急いだ。軍備の擴張、製鐵所の創立、鐵道及び電話事業の擴張、租稅制度の改革、關稅制度の確立、金本位制の採用等はこの時代の最も重要なる問題であつた。第四は日露戰役前後である。日露戰役は日清戰役に續く同一線上の事柄であり、之を財政史の發展といふ點からみれば、同じ系列に屬するものといつてよい。從つてこの時代の問題は、日清戰役前後の事情を一層發展せしめたものといふことが出來る。かくして明治時代の財政はその發足、確立、發展の各時代を通じて、日本資本主義の急速なる展開をそのまゝに反映してゐる。第五は大正時代の財政として、第一次世界大戰及びその後の財政を問題とする。世界大戰は我國をして政治的には交戰國たらしめたが、經濟的には局外的利益を與へる結果となつた。かくして日本經濟はこの時代に獨占資本主義の段階に達し、日本財政も資本主義體系の基礎を培はれたのである。しかもこの時代に關東震災の打擊があり、財政上の負擔は大正末期より昭和の時代まで持ち越されることとなつた。吉川氏の日本財政史はこゝで終つてゐるが、問題は更につゞく。昭和恐慌の財政より、滿洲事變、支那事變へと、日本財政の展開が極めて急速であることは周知の如くである。

土方博士の日本財政史は總說と各論とに分れ、總說では時代の背景の裡に、明治、大正、昭和の財政を述べてゐる。時代の分け方は吉川氏と等しく略々通說に從ひ、たゞ各時代の特徵をとつて、第一章資本主義育成の財政時代、第二章强兵財政の時代、第三章禍福經濟時代の財政　第四章國防國家建設時代の財政とする。明治以後の財政の發展が、かゝる國家構造の發展と並行したことは事實であり、そこに財政理論の基礎づけが含まれてゐることも興味ある事柄である。各論においては、經費、租稅、公債、地方財政が歷史的に且つ多くの資料を伴つて叙述されてゐる。總論と各論との間に幾分の重複はあるが、この兩者を織り交ぜることによつて、日本財政の發展の跡は一層明らかとならう。殊に土方博士の日本財政史が吉川氏のそれに比べて最近にまで及んでゐることは、昭和時代の財政を識る上において便利である。

いま日本財政の當面してゐる難問題は、その過去よりの發展を識ることによつて打開されるといふ意味において、日本財政史の研究は一刻も忽せに出來ない問題である。

川野重任著「臺灣米穀經濟論」

――日本學術振興會第二十一小委員會報告――

山本登

わが國南方政策の基地として、臺灣の地位は急速に重要性を獲得したかの感がある。時局下、軍事的根據地としての意義が、最も切實である事は言を俟たないが、經濟的にも、その役割は輕視すべからざるものがある。就中、かの「蓬萊米」の供給を中心に、わが國食糧問題解決の上に寄與する所は、頗る大であると見なければならない。

この事は、從來の臺灣産業が、所謂「米糖二本建」を主流として、いはゞ內地に對する農業領域としての發展形態を採り來つた事の、必然的歸結に外ならない。滿洲事變を轉機とする島內工業化運動の進展にも拘らず、現實の必要は尙とくに食糧供給地としての臺灣に、期待する所極めて多大である。

しかも前記の「米糖二本建」の原則は、屢々又米糖相剋の關係を胎むものであつた。臺灣農業開發の歷史は、概括的に見るならば、米作と製糖原料たる蔗作との、併存對立の經過でもあつたのである。而して蔗作を原料とする製糖事業は、糖業資本の活潑な活動の下に、特殊の農産加工工業として、近代的發展の過程を辿り來つた。これに反して、米作の方は、粗放的・原始的經營形態の中に殘置された。この意味において、兩者は全く對蹠的な存在を示す